

聞きがたり農村史Ⅰ～Ⅲ

東 敏雄編著

東京 御茶ノ水書房発行 1989.6、1989.12、1990.6

各250P 20cm 各¥2884

文書館史料は、いわゆる文字史料のみに限定されたものでなく、その媒体の素材を問わない。たとえば、景観なら撮影した写真が、民話であれば録音したテープが文書館史料となる。

このような各種史料を素材にして歴史的究明を行なうためにいくつかの新しい試みが行なわれており、一定の成果をあげている。そのひとつにオーラル・ヒストリーがある。

オーラル・ヒストリー（聞き書き）とは、人間の記憶の中に残っているものを収集し、記録したものをいう。ところが本書では「聞き書き」という一般的な表現を用いずに、「聞きがたり」という表現をとっている。この「聞きがたり」という用語は著者たちの造語だそうで、「聞く人と語る人、動作の主が二人である。その二つの動作をひとつに括って聞き語り」という意味合いから表現したとのことである。予め聞く狙いを定めて行なう「聞き取り」などと方法的に異なっている、ということが含意されているのである。

それはともかく本書には、「その時代を生き、文字も記録も残さなかった、しかも圧倒的多数であった人々との関連を抜きにしては、正確な時代相を伝え得ないであろう」という

著者の鋭い問題意識が反映しており、それが「聞きがたり」方法を駆使して臨場感あふれる生き生きとした近代農民生活像の再現に成功している、といえよう。

「ふだんの生活のありようは、没後しばらくは、家族たちの追憶の中に生きていたというものの、やがて永遠の闇の中に没し去っていく。あたかも、事実すらなかったかのように」といってよい一般農民に、自分の生きてきた時代を語らせ、記録し、それを活用することによって、これまで文字史料のみでは見えてこなかった部分を明らかなるものとして、あるいはすでに知られている事実をより豊かにするものとして、本書の「聞きがたり」方法は大きな意味を持っている、といっ

てよい。

人びとの記憶を人類の文化資産としていかに記録し、それをどう保存し活用するか、ということは現代文書館にとって大きな課題である。そのような文字以外の文書館史料問題を考えるとき、本書はさまざまな示唆を与えてくれるであろう。

高橋 実・茨城県立歴史館